

学位請求論文要旨

「ナラティブ的探求」で探った中堅大学日本語教師の成長
—持続可能性日本語教育の場合—

2021年1月

城西国際大学大学院 人文科学研究科

比較文化専攻

趙 志麗

教師は、教育実践に携わる中でたくさん問題にぶつかり、それを克服しながら成長していく。教師としての経験を重ねる中で、各ステージに合わせて、教師の発達課題は違っていると考えられる。中堅教師で考えると、彼らは多くが組織の中でリーダー的役割を期待され、同時に家庭では子育て中であり、いわゆるワーク・ライフバランスの問題に直面する。ところが、教師の成長を論じる場合、従来、このような発達課題の違いが無視され、その結果、教師の専門性の発達という一つの観点からのみ論じられてきたと考える。教師研修も、対象が新人教師であれ中堅教師であれ、専門性の向上を内容とするものが多い。成長を求める中堅大学日本語教師にとっては、研修によるサポートが十分ではなく、途中で挫折し成長を諦めるものも出てくるなど、現実には厳しいと言える。

そこで、本研究は、中堅大学日本語教師に焦点を当て、この教師たちの支援の在り方を探ることを目的とする。そのための第一歩として、中堅大学日本語教師は、どのような課題に直面し、その課題をどのように克服し、教師としての成長を達成しているのかを明らかにすることを研究課題として設定した。その際、私自身が中堅大学日本語教師の一人であることを踏まえ、研究者自身も研究参加者とみなす「ナラティブ的探究」という研究手法を援用し、一般性や普遍性の追求ではなく、個々の教師の成長に着目する質的研究を行うこととする。

本研究は7章から構成されている。

第1章では、まず、中堅大学日本語教師は、政府主導の教育改革のリーダー的役割を期待される一方で、教育業績に加えて研究業績なども重視され、ワーク・ライフバランスが取れず、仕事と家庭の両立が困難になるといった課題に直面していることを述べた。しかしながら、そうした中堅大学日本語教師の課題を直視し、その解決に向かう教師たちの取り組みを促し支える役割を教師研修が十分に果たしているとは言えない現状を見た。特に、教師「成長型」の教師研修として高く評価されている全国大学日本語教師研修会においても中堅大学日本語教師に焦点を当てた研修は提供されておらず、教師の成長が、専門性の向上という一点から論じられている点で限界のあることを指摘した。

以上の問題を踏まえて、本研究の目的及び研究課題を示した。具体的には、中堅大学日本語教師の成長を支える教師研修の構築という目的の下に、本研究では、中堅大学日本語教師が、どのような課題に直面し、その課題をどのように克服し、教師としての成長を達成しているのかを明らかにすることを研究課題とすることを述べた。さらに、中堅大学日本語教師の一人である私自身も研究の参加者とみなす「ナラティブ的探究」という研究手法を援用し、個々の教師の成長に着目する質的な研究とすることを述べた。

第2章では、私の「学び、仕事、研究」にまつわる個人史を述べ、本研究の個人的出発点を明らかにした。

第3章では、本研究の理論的出発点について述べた。まず、本研究の研究関心と深い関連を持っている教師教育研究のパラダイムの転換と日本語教育における教師成長アプロ

一歩の発展を概観した。続いて、持続可能性日本語教育が依拠する言語生態学を理論的枠組みとする教師教育の先行研究として、楚（2020）の実践研究を紹介し、本研究の持続可能性日本語教育における中堅大学日本語教師の成長に着目する理由を述べた。次に、研究方法の「ナラティブ的探究」を取る理由と特徴を論じ、そして、日本語教育の領域の研究に本格的に「ナラティブ的探究」を援用した李（2003, 2004）の研究を典型的例として取り上げて、検討した。以上の先行研究を踏まえて、本研究の課題を明確化した。

第4章では、本研究の調査フィールド及び分析方法を紹介した。まず、フィールドの概要を述べ、続いて、研究参加者のヤンさんと香ちゃん、また他の関係者についても紹介した。最後に、データの取集法と本研究の分析方法を詳しく述べた。

第5章では、ジレンマに陥っていたヤンさんのナラティブを記述し、解釈した。「止まらない電車」のナラティブから、人間活動と教師活動のジレンマに陥っていたヤンさんの生活実態を詳しく述べた。続いて、ヤンさんの個人史を幼少期まで遡り、彼女が直面している問題の要因及び要因間のつながりを探る過程を描いた。さらに、「Dゼミ」受講をきっかけとしたヤンさんによる自身の問題の捉え直し及びつながりの可視化の過程を示し、ヤンさんが人間活動と教師活動の統合として課題解決に至ったことを確認した。

以上の探求を通して、私はヤンさんの変化や成長の軌跡を描いた。そして、ヤンさんへの探求をしながら、研究者の私も私の問い（中堅大学日本語教師は、どのような課題に直面し、何故、どのようにして、その課題をクリアし、教師としての成長を達成するのか。）をめぐって内省をし、私の内省も研究の一部として、第五章に書いた。以上の探求は、私とヤンさんの共同作業の結果である。

第6章では、本心を言わない香ちゃんのナラティブを記述し、解釈した。まず、彼女の言行不一致として捉えられる現象に対して「Dゼミ」でなされた議論を記述し、それによって引き起こされた研究者である私の内省を述べた。また、言行不一致という現象を切り口として、本心を言わない香ちゃんの実像が見えてくる過程を描いた。続いて、学習者同士が共有してくれた香ちゃんのストーリーを用いて、香ちゃんと相互交渉をすると、香ちゃんが自分の本心に気づきはじめたというストーリーを記述した。更に、本心を言わない現象の裏に隠された「逃げる姿勢」を明らかにし、学習者同士の皆と違っており、コンプレックスを感じるという問題や葛藤の実態に迫った。「Dゼミ」に参加してから、彼女が直面している問題をどのように克服し、成長していったかを描いた。また香ちゃんが、自身の個人史への意味づけの変化により、言語と言語教育への認識を変化させていったことを描いた。

以上の探求を通して、私は香ちゃんの変化や成長の軌跡を描いた。そして、香ちゃんへの探求をしながら、研究者の私も私の問い（中堅大学日本語教師は、どのような課題に直面し、何故、どのようにして、その課題をクリアし、教師としての成長を達成するのか。）をめぐって内省をし、私の内省も研究の一部として、第六章に書いた。以上の探求は、私と香ちゃんの共同作業の結果である。

第7章では、本研究を振り返り、自分の学びや変化、成長を二つの側面から述べた。まず、研究の出発点において立てた問い、つまり「中堅大学日本語教師の成長とは何か」についての私の理解を紹介した。

そもそも、現場にいた私は中堅教師の成長＝知識の熟達や教授法の熟練だと思っていた。そのため様々な教師研修会に参加した。しかし、いつも不全感が残った。私は、高度な学問の修得によってはじめて局面の打開ができ、自分の教師としての成長を図ることができると考えて、楓大学の博士コースに進学した。楓大学で所属することになった「Dゼミ」では高度な学問の修得はできなかった。しかし、そこで、「持続可能な生き方を追求する言語教育」を経験し、専門知識の熟知や教授法の熟練に重点を置く教師研修よりも、「Dゼミ」のように、一人一人の教師が当事者として自分が直面している切実な課題を議論の対象とし、学習者も含めて持続可能な生き方の追求をゴールとして、議論を闘わせる場を提供する研修の方が中堅教師の成長には意義があることを私は直感した。本研究を通して、中堅大学日本語教師の問題は教室内の問題に限らず、教室外に拡張し、そして、教室以外の問題が中堅大学日本語教師の直面している問題の中心になる場合があることが分かった。従って、中堅大学日本語教師の成長を考えると、専門性の向上に限定せず、教師活動を人間活動に統合すること（ヤンさんが学生と一緒に自分の持続可能な生き方を考えたように）、そして、女性を対象とする場合、ジェンダーに繋げて考察する必要があると考える。次に、性別、置かれる文脈の違いによって、教師個々の違いが際立ってくることが分かった。従って、中堅大学日本語教師向けの教師研修では、論理・科学モードというより、ナラティブモードの思考が必要である。つまり、研修では、個々の教師は自分の直面している問題に対して、自ら自分なりの解決法を作っていくことが大事である。更に、本研究を通して、「秘密の物語」を出し合い話し合うことが中堅大学日本語教師の成長にとって重要であることが分かった。そこで、中堅大学日本語教師の成長にあたって、ナラティブモード思考の上で、「秘密な物語」を言える場を提供することが大事だと考える。最後に教師の全面的な成長を実現するとき、「つながりの可視化」がキーワードになる。従って、中堅教師にとって、つながりを見える目を養うことが大事だと考える。

次に、研究方法に対する私の理解を紹介した。最後に本研究から得られた示唆を述べ、本研究の限界と今後の課題を提示した。